日本歯科医史学会々誌・第3巻
第1号通巻9号・昭和50年5月

わが国における梅毒歯の記載について

谷津　三雄　　鈴木　邦夫　　吉田　正詔*

小幡英之助が明治8年8月頃，赤星研造が試験管で石黒・三宅の両氏が立合って1）歯鍵を示してその用法，2）抜去した大臼歯を示し，その名称，左右別および抜去法，3）ハッチンソン氏歯に関することの3問に答え歯科医術開業試験に合格し独立した歯科として免許が下付されたのが明治8年10月2日で100年前のことである．そこでこのハッチンソン氏歯を中心とした梅毒歯の記載がわが国にいつ頃から散見できるについてしらべ若干の知見をえたので報告する．

1. 英国沙夕：新頓 Neton 著：赤穂大見荻野先生閲，**黴療新法**，尚古書屋蔵版（明治4年8月発行）

本書は乾，坤の2冊の和綴の 15×22 cm よりなり，英医新頓（ニュートン）が横浜花街の梅毒院における経験録を荻野氏が補訳して出版したもので，坤は主として附図で梅毒に関する着色図33をあげているが，その第33図が形態からしてハッチンソン氏歯牙である．解説に「凡黴毒遺伝ノ孤児ハ成育機ヲ妨ケテ身体自ヲ虚衰シ外面青白色ニシテ皮質甚タ粗造ナリ額骨高凸シ鼻梁低下シ視器毎ニ病ヲ帯ヒ歯牙列ヲ攪シ」とあって鞍鼻と眼科的疾患の合併を示唆している．

2. 歯科提要：小林義直訳述，パライト氏撰著（明治22年7月7日初版，同34年3月27日再版）

楳毒歯の項に

「ハッチンソン氏ハ唯先天梅毒ヲ所有スル人ニノミ現ハルル一歯形ヲ記載シタリ，其歯形ハ屢々誤テ直前ニ記載シタル瘦削性欽欠ト混淆セラルル者ナレトモ梅毒歯ハ全ク平坦ナル琺瑯質ヲ所有スル差異アリ．梅毒歯ノ主ナル徴候ハ其側面相離開セス，却テ切縁ニ向テ相集合シテ恰モ萎縮セル外見ヲ所有スルト切縁上ニ半月形ノ切痕ヲ所有スルトニアリ（図ヲ参考セヨ）但シ唯一切歯ノミ斯ノ如ク成形サレタルコト多ク二・三或ハ四枚ノ切歯此畸形ヲ現ハスコト亦鮮カラス加之時トシテハ第一齲歯モ此畸形ヲ現ハスコトアリ，然レトモ先天梅毒ヲ所有スル人皆此畸形歯ヲ所有スルニハアラス，其存在ハ先天梅毒ノ鑑別ヲ確定スル一参考証ニ供スベシ」は，おそらくわが国でハッチンソン氏梅毒歯を名記した最初のものであろう．なお第2版では続いて「或人ハハッチンソン氏畸形ノ乳歯上ニ現出スルコトヲ非議セリ，然レトモ予ハ此2例ヲ確然ト実験シコレマン氏ハ其一例ヲ報告シタリ」

と乳歯におけるハッチンソン氏歯牙の症例が報告されているが，今日では乳歯の発生は誤りである．

3. 畸形歯論：小島原泰民訳補（明治32年11月30日発行，丸善書店）

黴毒歯の頃に（P 24～31）

「先天黴毒ノ結果ニ出テタル変形久歯ノ類別上ニ注意ヲ惹キシハ，ゼー・ホッチンソン氏其人ヲ以テ嚆矢トス，実ニ同氏ハ歯牙ノ形状上ニ於ケル一定ノ錯違ハ先天性全身黴毒存在ノ標榜トシテ診断上甚ハダ有価ナルヲ論告シ該錯違歯ヲシテ黴毒性間質角膜炎ト与ニ之ヲ類別セリ」

は眼の症状を疾患名として併記した最初の記載と思われる．なおハッチンソン氏をもって嚆矢とすと記載しながら，その発表年度や論文名の記載がない．しかし「今同氏カ黴毒歯ニ就テ説述セル所ヲ左ニ記載ス」とし「ホッチンソン氏曰ク，抑モ先天性黴毒ニ汚瀆セル人ニ於テ既ニ久歯ノ発生ヲ終ハルヤ其切歯ノ状観ヲ熟視スルニ形状，色訳及大小等ハ甚ハダ特別ニ出ルヲ認メ猶ホ余ノ歯族

Conciderations on Records of Syphilitic tooth in Japan

* Mitsuo YATSU, Kunio SUZUKI, Masaaki YOSIDA　日本大学松戸歯科大学

殊ニ犬歯ニモ先天性黴毒ノ存在ヲ診定スルニ足ル諸種ノ特観ヲ表出スルモノナリ．而シテ上中心切歯ハ就中先天黴毒ノ存在ヲ検定シ得ラルル示針トナル」とし半月様の欠損など形態の異常の他に華巴士大学眼科教授学士ヘンリー・ウヒリアム氏やジョン・トームス氏の説なども併記し，かつ12才の幼童と14才及17才の2少娘とに就て得た黴毒歯の附図が掲載されている．

4. 歯科病理学：奥村鶴吉著(東京歯科医学院歯科医学講義，明治35～37年)

楔毒歯 Syphilitic Teeth：此畸形ハ発見者ニ従テ又，ハッチンソン氏畸形歯 Hutchinson Teeth ト云フ，本症ト慢性中耳炎ト間質性角膜炎トヲ以テ遺伝楔毒ノ徴候ト為ス……遺伝楔毒歯ハ屢々上顎骨前歯部歯槽突起ノ発育不全ヲ伴フと述べている．

5. 歯科学通論：佐藤運雄(明治40年3月10日初版，大正7年4月15日7版)

初版に半月状截痕，前歯殊ニ中前歯ノ截端ニ半月状ノ欠損ヲ顕ハスコトアリ，會テ，ハッチンソンガ初メテ記載説明シタル処ナルヲ以テ之レヲハッチンソン歯 Huthinsons teeth ト称スと述べプライスブエルク氏のハッチンソン氏歯牙の附図を掲載している．その第7版には「ハッチンソン黴毒歯 Syphilitic Teeth トハ截端ニ半月状ノ截痕ヲ有スル歯牙ニシテ上顎中切歯ニ顕ハルルコト最モ多く下顎切歯及第一大臼歯ニモ亦稀ニ之ヲ見ル，氏ハ之ヲ以テ遺伝黴毒ノ一主要特徴トナシタレトモ常ニ必ラズシモ然ラズ」と述べ初版とは別な Burchard の黴毒歯の附図を掲載しているのみでなく，更に「遺伝黴毒ハ極メテ多大ノ感化ヲ歯牙ノ形成ニ及ホスコト疑ナシ，蓋シ胎生ノ後半及生後第一年ノ頃ハ黴毒が最影響シ易キ時期ニシテ又遺伝黴毒ヲ有スル小児ニ所謂ハッチンソン歯ノ顕ハルルコト多キ事実ニヨリテ之ヲ知ルベシ……パライト等ハ曾テ遺伝黴毒ノ確証ヲ有スル双胎児ニ於テ其一ハ発育不全歯ヲ有シ他ノ一ハ健全ナル歯牙ヲ有セルヲ目撃シタリト云フ，其他黴毒ノ拡布セル人種中ニ必ラズシモ多数ノ発育不全歯ヲ認メサルコト，及黴毒ニ感染セサル動物ニシテ而カモ発育不全歯ヲ有スルコト等ノ事実ハ又以テ黴毒説ノ声価ヲ左右スルモノニアラサルカ……遺伝黴毒ノ疑アル初生児ニ駆黴療法ヲ施コスベシト云フモノアレトモ通法ト称シ難シ」など原因，組織，更に文献的考察から治療法及梅毒との関係などの疑問について詳述されている．又佐藤運雄著，近世歯科学（明治44年3月15日）には歯科学通論の初版と同文の解説がみられる．

6. 歯科病理学：花沢鼎著（大正5年）

第5章歯牙ノ異常の六，半月状歯の項に「所謂，ハッチンソン氏ノ先天黴毒歯ト名ケラルルモノニシテ名ノ如ク切端ニ半月状ノ特異ナル欠損ヲ有スルモノヲ云フ，主トシテ永久中切歯ニ現ハル，ハッチンソン氏ハ嘗テ実質性角膜炎，慢性中耳炎及半月状歯ノミヲ以テ遺伝黴毒ノ特徴ナリトセリ……」は今日の Hutihinsons Triad と同じである．又「著者ハ遺伝黴毒ニヨリテ斃レタル生後二週ノ小児ヲ剖検シ全身諸器官殊ニ副腎，肝臓等ニ於テ無数ノスピロヘーテヲ証明シ得タルト同時ニ其歯芽中ニ於テモ亦多数ニ存在スルヲ見タリ」とし，この剖検例について第131図に示セルハ13才ノ男子ニシテ明ニハッチンソン氏ノ三徴候ヲ具備セルモノナリ（右眼ハ全ク失明セリ）との記載は外国の文献からの転載ではなくわが国における症例と剖検の記録として特筆される，なお既述の文献は間質性角膜炎で誤りであったものが実質性角膜炎と正しく記載されているのは花沢教授は真の病理学者であったためであろう．

考察と結語

このようにハッチンソン氏歯牙や先天性又は遺伝梅毒歯についての記載をみることができても，いつハッチンソンがこの歯牙の形態異常を発表したかについては詳らかでない．歯科・口腔科領域の冠人名徴候疾患・症候群事典による Hutchinsons 症候群（別名，Hutchinson 3徴候）は1）永久上顎中切歯の切縁に半月状欠損，2）角膜実質炎，3）迷路の疾患(内耳性難聴)をあげ，Sir Jonathan Hutchinson ジョナサン・ハッチンソンはイギリス（ロンドン）の外科医および皮膚科医1828～1913年と解説されている．そこで，この1828（文政11年)～1913（大正2年）即85才の生存期間中を中野操著：増補，日本医事大年表（昭和47年12

月12日，思文閣）をみると1846（弘化3年）に英ハッチンソン肺活量計ヲ考案ス，1913(大正2年)にハッチンソン歿スとあるのみである．又，藤井尚久編：医学文化年表（昭和17年7月10日，日新書院）にも1846年の肺活量計の考案と1913年に英Hutchinson（1828—，遺伝梅毒の三徴候を記載しスピロメーターを発見す）歿すとあるにすぎない．又，小川政修著：西洋医学史（昭和18年9月30日，日新書院）にもハッチンソン Jonathan Hutchinson（1828年生，1913年歿）は遺伝黴毒における歯牙異常の診断的意義を明かにしたと記述され，また医学大辞典（昭和32年1月10日，南山堂）のハッチンソン3徴候 Hautchinson's triad. Hautchinsonsche trias に晩発性先天梅毒に際して見られる3徴候について詳述しながらも Sir Jonathan Hutchinson はイギリスの医師，1828～1913とあるにすぎない．又，土肥慶蔵著：皮膚科学上巻（明治43年7月15日初版，昭和4年9月25日，第13版）の皮膚科史の項にハッチンソン氏 Jonathan Hutchinson（1828～1913年）モ亦夙ニ碩学ヲ以テ推サレ殊ニ遺伝黴毒ノ研究ニ功アリと簡単に記載され，又，世界黴毒史（昭和48年5月30日復刻，形成社）にグロス著，石黒恒太郎訳：黴毒新説（写本）（慶応3年，1867）に小児に発する梅毒症の一項を附し「小児此毒ノ為ニ生歯腐蝕スルモノハ前歯先ヅ腐リテ角歯ニ及ブ，其色穢茶ニシテ漸ク琺瑯質ヲ損亡ス」との記載があると述べられているので，これがわが国における梅毒歯の最初の記載とも考えられるが，未見であるし，又，梅毒歯の附図があるか否かについても不明である．又，黴毒学古文書解題のハンター著，黴毒学（原本第1版1786年，リシュロー仏訳，1845年第1版，J. Hunter, Traité de la Syphilis Traduit Par G. Richelat, Paris, 1845）の巻頭に歯牙の発生史，歯牙の疾患の2章があるという．しかしハッチンソン氏歯牙の記載はみあたらない．また川上為次郎著，歯科医学史（昭和6年8月1日，金原商店）には記載はないが，**本間邦則著歯学史概説**には1858（安政5年）ハッチンソン：晩発性先天梅毒にみられる3徴候について報告と明記されている．又，豊田実著，口腔病理学（昭和22年，歯苑社）には形態異常の歯牙を遺伝黴毒患者に屢々認めらるることを創めて注意したることは皮膚科医の Hutehinson であって，同氏が1836年に，之れに関する論文を発表して以来，かかる歯牙を特に Hutchinson 歯と称すると明記され，また石川悟朗編，口腔病理学Ⅰ（永末書店，1969）には，Hutchinson の歯は彼によって始めて（1857）記載されたとある．

そこで，三木栄著，体系，世界医学史（書誌的研究）（1970，医歯薬）をみると1858，Hutchinson Jonathan（1828—1913）：Report on the effects of infantile Syphilis in marring the development of the teeth, Trans path Soc. Lond, 1858，梅毒におけるハッチンソンの三徴候（イギリス）又，その伝記は Hutchinson H. Jonathan Huthinson the life and letters，1946が記載されているので，本間氏の記載が正しいと思われる．なお，小島原泰民訳：歯科病理各論（明治23年12月6日），伊沢信平校閲，高橋直太郎訳補：新纂歯科病理学（明治30年3月25日）高山紀斉著：保歯新論（明治14年6月）河田，大月共訳：歯科全書（明治18年8月）には，それぞれ記載されていない．

文　献

1) 英医新頓著：黴療新法．明治4年8月．
2) 日本歯科医師会：歯科医事衛生史，前巻．昭和15年10月．
3) 小林義直：パライト氏著，歯科提要．明治22年7月初版，同34年3月再版．
4) 奥村鶴吉：歯科病理学．明治35～37年．
5) 小島原泰民訳補：畸形歯論．明治32年11月．
6) 佐藤運雄：歯科学通論．明治40年4月初版，大正7年4月第7版．
7) 佐藤運雄：近世歯科学．明治44年3月．
8) 花沢鼎著：歯科薬理学．大正5年．
9) 土肥慶蔵：皮膚科学上．明治43年7月初版，昭和4年9月13版．
10) 小川政修：西洋医学史．昭和18年9月．
11) 川上為次郎：歯科医学史．昭和6年6月，金原．
12) 藤井尚久：医学文化年表．昭和17年7月，日新医学．
13) 中野　操：増補，日本医事大年表．昭和47年12月，思文閣．

14) 小川鼎三他：医学大辞典．昭和32年1月，南山堂．
15) 豊田　実：口腔病理学．昭和22年10月，歯苑社．
16) 石川悟朗：口腔病理学上．昭和44年，永末書店．
17) 土肥慶蔵：世界黴毒史．昭和48年5月，形成社．
18) 本間邦則：歯学史概説．昭和46年9月，医歯薬出版．
19) 押鐘篤監修：歯科ハンドブック，手技編．昭和45年2月，文京書院．
20) 三木栄：体系，世界医学史（書誌的研究）．昭和47年2月，医歯薬出版．